

編集後記

今年は例年に比べて早い冬将軍の到来でしたが、本研究懇談会会誌第22巻2号をお届けするのがまた予定よりも遅くなってしまいました。前号のおくれがとりもどせないまま、12月中旬にハワイで開催されました環太平洋国際化学会議と重なり、またもや会員の皆様への会誌の発送が送れてしまい申し訳ございませんでした。

今回は、本誌の International Advisory Board のお一人でありますタイの Chiang Mai 大学の Grudpan 教授に海外からの巻頭言としてご寄稿をお願いしました。本フローインジェクション分析研究懇談会やその機関紙である Journal of Flow Injection Analysis が世界の F I A やその関連の分析法の学術的發展やその研究者に大きな役割を果たしていること、さらにその期待が大きいことがメッセージに込められています。国内からの巻頭言としては、琉球大学地域共同研究センターの喜納兼勇先生よりご寄稿をいただきました。1979年にアムステルダムで開催された第1回の Flow Analysis に参加されたときの様子を回想され、来年ポルトガルで開催される第10回の Flow Analysis に思いを馳せられています。本年度度 F I A 学術賞には、長年にわたって F I A 法の基礎と応用に携われ、特に 1994年から11年間に渡って本研究懇談会委員長を務められた本水昌二先生と固定化酵素リアクタと化学発光検出法を F I A 法に応用され、高感度で高機能な定量法を開発された木羽信敏先生に贈られました。また、F I A 技術開発賞は F I A 法を採用した自動分析法の開発をされたダイアインスツルメンツの島川勝之氏と

HMEの服部一彌氏に贈られました。総説は1999年頃にスペインの Cerda 教授らによって提案された多数のシリンジポンプを利用した F I A 法 (Multisyringe Flow Injection Analysis) について、その原理やその多くの実例について執筆していただきました。また、国内からは千葉大学の小熊幸一先生に環境中鉛の F I A 法の総説をお願いいたしました。

研究論文欄には、国外から4報の論文を掲載しております。本年9月にタイのチェンマイで開催されました第4回の流れ分析に関するシンポジウムの様子については愛知工業大学の酒井忠雄先生に報告欄にご寄稿いただきました。また、8月に愛知工業大学で開催されました第7回 F I A 技術講習会についてご感想を受講生の方々にご寄稿いただきました。10月に高知大学で開催されました第46回 F I A 講演会の報告を実行委員長の受田浩之先生にご寄稿いただきました。

国内の学会情報は徳島大学の田中秀治先生まとめていただきました。また FIA Bibliography は高知大学の受田浩之先生をお願いいたしました。あとがきにもありますように、本欄はこれまで皆様の文献情報として大きな役割を果たしてまいりましたが、編集委員会ではその存続や廃止について議論が出てまいりました。皆様のご意見を参考に今後の方針を考えてまいりたいと思います。皆様のご意見をいただければありがたく存じます。

JFIA 編集委員長
今任稔彦